

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 133 号

2025年 6月



第 197 回観察会・口太山 早春の植物観察会

4月27日に第 197 回高山の原生林を守る会自然観察会を口太山で開催しました。参加者は 14 名でした。口太山での観察会は東京電力福島第一原子力発電所事故が発生した 2011 年 11 月以来 14 年ぶりになります。当時の口太山を知る参加者からはきれいに整備された駐車場に驚きの声が上がりました。

春の陽ざしを浴びて、期待に膨らませて出発しました。先週の下見で、ちょうど木々は芽吹いているだろうと予想していました。しかし、芽吹いた森の煌めきは予想をはるかに超えていました。加えて、沢沿いの登山道に沿ってヒトリシズカの群落が続き、上を見ると春の陽ざしを透過した新緑が輝き、浮かぶ木々の幹のシルエットが作る絶景に感嘆。乳子岩への道沿いではアケボノスミレのピンク色の花がまとまって美しい姿を見せてくれました。そしてウラジロノキの端正な若葉も。山頂への登山道に戻り、登っていくと、萌黄色の斜面にピンクの花に飾られたトウゴクミツバツツジが 1 株。1 週間前は全く気付かなかっただけに感動です。

猿ノ首取り岩場の前で小休止。この辺りはブナが植生。美しい若葉を姿を見せていました。昨日、登った西会津の竜ヶ岳よりブナの展葉は進んでおらず、それだけこの地では春の訪れは遅いのかなと、不思議な感覚。迷い平を過ぎるとミヤマレンゲの白い花があちこちに。蕾から開花した株まで見られ、しばらく楽しめそうです。



ヤマツツジ この瞬間だけの芸術



トウゴクミツバツツジ



これ以上無い背景

尾根に出て、山頂までの登りでは日差しを浴びて宝石のように輝くヒツバカエデの葉が林間を飾っていました。これだけヒツバカエデの美しい葉が木々の間に煌めく姿が続く登山道を歩いたことはありません。全員、無事に山頂に到着。和気あいあいと賑やかな昼食。集合写真を撮影して下山の準備をしていると虫好きの会員から声が、青紫色の甲虫でした。調べてみるとツチハンミョウでした。

煌めくヒツバカエデヤトウゴクミツバツツジ、煌めく新緑の森の景観を再び堪能しながら登山口へ、そして最後の観察スポット、ニリンソウの群生地へ。山友から「エンゴサクですよ！」の声、下見では確認していなかったヤマエンゴサクがあちこちに。いい香りを楽しみました。ゆっくりとニリンソウ群落を観察し、戻ります。途中では思わぬスミレ達にも出会え、最後の最後まで春の森を楽しませてもらった口太山でした。

高山の原生林を守る会 自然観察会「口太山・早春の観察会」に参加して

田村市船引町 長嶺 雅昭

「高山の原生林を守る会」の活動を以前から興味を持っていましたが、自然保護協会(NACS-J)のチラシを通じてこのイベントを知り、樹木や花々への関心から初めて参加することになりました。この機会にどのような自然が見られるのかと胸を膨らませながら、わくわくした気持ちで臨みました。天候は晴天ながらも朝は肌寒く、風も強かったものの、時間が経つにつれて暖かくなり、観察には最高の日和となりました。

観察路

まず登山口の水場では、鹿威し(ししおどし)の音色に耳を傾け、ヤマザクラの花びらが水かめに浮かぶその美しい景色に感嘆しました。近くにはニッコウネコノメソウや葉の中央に花が咲くハナйкаダなど、印象的な植物たちが顔を見せていました。さらに登山道沿いに広がるコゴミ(クサソテツ)は、中通りでは珍しく、その姿に思わず足を止めてしまいました。

森の中へ進むと、溪谷沿いで猿滑の滝を見つけ、涼しさを感じながら木々の新芽に春の訪れを感じました。乳子岩の近くでは鮮やかなピンクのトウゴクミツバツツジが咲き誇り、その美しさに目を奪われました。また、ブナやミズキの木肌の美しさ、オオカメノキの白い花もきれいでした。

頂上で

頂上からは、蔵王は霞んでいましたが安達太良山や吾妻山などの雪をまとった雄大な景色が広がり、皆さんと分け合った食事の時間は格別でした。また、佐藤さんからこの会が設立された当時の歴史を伺い、その背景に込められた情熱を感じることができました。この山はヒツバカエデの宝庫で日に照らされると金色に輝き、ミヤマエンレイソウやエンレイソウ、アケボノスミレ、ヒナスミレ、カタクリなどの可憐な花々が目を楽しませてくれました。

最後のひととき



岩塊帯の下り



ニリンソウ畑



カジカエデの下で



ヒツバカエデ



ヤマエンゴサク

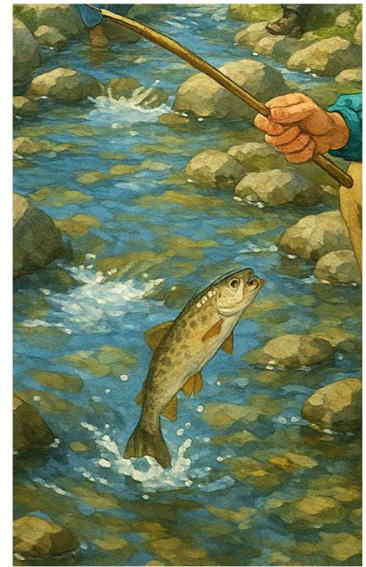
下山口付近では、ニワトコが咲いていて、そこから少し石尊神社へ向かう途中で、ニリンソウとヒトリシヅカの群生地に出会い、その景色に心癒されながら観察を楽しみました。参加者の皆さんから教えていただいた花や木の名前は、すぐには覚えきれないものの、こうした自然を眺めながらゆっくりとその魅力を味わいたいと思います。

寄稿

岩魚釣り

東梅誠太郎(南福島クリニック前院長)

陸中海岸のど真ん中、岩手県釜石市で育った私は子供の頃から海釣りはみぢかなものでした。夏には涼を求めて大勢の町の人が魚市場の岸壁に集まってサバ釣りをします。サビキという何本もの擬餌針のついた仕掛けで釣るのですが面白いように一度に沢山釣れるのでたちまちにバケツに溢れる位になります。食用にするには小ぶりなのでほとんどが庭や畑の肥料になります。楽しくて毎日のように続けると親にもう沢山だから捨ててこいと言われたものです。小さな漁港の岸壁では海タナゴ釣り。わざと細い竿で釣るので引きが強くてこれを楽しむのです。夜には高級魚の“ソイ”を狙います。リアス式海岸には沢山の半島があり、半島には無数の入り江があって岩場と砂浜から成っています。岩場からは投げ釣りでアイナメ、砂地ではカレイが釣れます。特別な仕掛けを使って毛ガニもとれました。竿を投げこんでひと泳ぎしてから引き上げるとアイナメが釣れています。重いおもりを使うので、“向う合わせ”になり逃げられる心配はありません。



大学生の頃にはお金を出して釣船使うようになり、自由に場所の移動が出来るので、大きめのアイナメやカレイが沢山釣れます。毎年のように友人や後輩、恩師や親戚の人達等々、大勢の人達を招いて船釣りを楽しみました。赤十字病院時代には“背掛け会”という同好会があり、メンバー仲間と大型バス一台を借り切って父の別荘のある三陸町まで麻雀をしながら遠征し(何とバスの後部に麻雀卓が備えてあったのです)船釣りをしたこともありました。塩釜の漁港で友人の持つ小さな釣船で一晩中ハモの夜釣りしたことも懐かしく思い出されます、海釣りの話はきりがないので割愛します。

釜石の町中を流れる川ではハヤやオイカワを釣りました。一つの湾には一つの町があり一本の川が流れています。父が鮎釣りが好きだったのでよく一緒に連れて行ってもらいました。隣り町の知り合いの農家で種鮎を購入し、岩があって流れのある所で“友釣り”をします。私はよどみに行き毛鉤を使っての“ドブ釣り”、鉤には鮎を傷めないように“返し”がないので道糸を緩めると逃げられてしまうので釣り上げるまで結構むずかしいのです。

さて前置きが長くなってしまいました。本題に入ります。福島医大の学生時代は山岳部に入り登山活動をしていました。夏山合宿は飯豊連峰に行っていたのですが、ある年から北アルプスになりました。裏銀座、後立山～薬師岳～槍ヶ岳のコースに遠征しました。薬師岳コースに行った時の出来事です。富山から電車で千寿ヶ原駅行き、ここから観光客は電車とバスで立山直下の室堂へ行けるのですが、そこは山岳部のプライドがあるのでつらいのを我慢して40kgの重い荷物を背負



雲の平(wikipedia.org/)

い、称名の滝を右手眺めながら大日岳を經由し左手に剣岳を見ながら立山にたどり着きます。そこから薬師岳を経て槍ヶ岳に至る長い縦走路コースになりますが、丁度疲労がたまった頃に水晶岳の近くに“雲の平”という大平原が忽然と広がって現われます。2600mの日本一標高の高い溶岩台地で、お花畑、池塘や美しい火山岩が点在し“天上の庭園”、日本最後の“秘境”とも呼ばれている場所で黒部川の源流にもなっているすばらしい所です。ここで丸一日の停滞、即ち休息日を取りました。その日の行動は各自自由、天気も良く中には自分の分担した生野菜を少しでも軽くしたいと“天日”に干している者もいます。

私は仲間4人で岩魚釣りに出掛けました。それ程遠くない所に黒部川の源流がありました。源流と言っても溪流といったイメージではありません。どこから湧き出してくるのか石のゴロゴロとしている間を幾筋もの小さな流れになって始まっているのです。川幅は20m位だったと思います。水流も少ないので浅い流れの所々に小さなたまりがある程度でした、こんなじゃ魚だって泳げまいと全員がすっかり落胆しました。折角来たのだから少しやってみようかと気を取り直して準備にかかりました、といっても用意してきた釣り道具は先輩が持参したハリスのついた鉤だけでした。着ていたヤッケの紐を引っぱり出して道糸代わり、1m位しかないの短い上に太さも2、3ミリあるのでハリスを固定するのに一苦労竿はその辺に転がっている折れた枯れ木の枝です。何とも立派なものが出来上がりました。さて餌は？その辺に飛んでいる虫を追いかけて捕まえ鉤にぶら下げ出来上がりです。

どうせ釣れっこないと思っているので、やけっぱち気味に無造作に竿を振っていました。1時間位過ぎては当たりは全くなく、そろそろ帰ろうかと思い始めたその時に、いきなり“ググーッ”と竿が引っ張られ慌ててひっぱり上げると何と岩魚が掛かっているではありませんか、15cm位の小ぶりのものですがびっくり仰天、宝物を得たような心境でした。これが岩魚釣りにとりつかれた始まりになりました。それから山行の合間に主に吾妻山の大倉川に一人で行きました。谷地平の小屋に泊ったり沢筋にツェルトで寝たり、日帰りだったりしました。小滝上の岩の多い溪流には沢山のきれいなよどみがあって、透き通った水の中には何匹もの岩魚が泳いでいましたが中々釣れなくて行く度にエサを変えてみるのですがうまくいきませんでした。“見える魚は釣れない”とはよく言ったものだと思います。むしろ上流の小さな枝沢の方が釣れたりしました。

岩魚はとても美味しい魚です。他の溪流でも釣ったりしましたが圧巻は何といっても大鳥池での岩魚釣りです。山岳部には以前から大鳥池には有名な“タキタロウ”の他に沢山の岩魚が住んでいるという伝説めいた話がありました。山形県の朝日連峰、以東岳のすぐ下の高い所にある大きな池です。実際に調べてみようと思いがまとまり、仲間3人で出掛けました。鶴岡からバスで麓の朝日村に行き、そこからは村の人の軽トラの荷台に乗せてもらって大鳥川沿いに行ける所まで行ってもらいました。5月初旬とは言っても山奥ですからまだ雪が残っていて終点の泡滝ダムまででは行けません、そこから登山口まで歩き登りが始まります。登山道には1m以上の雪があり途中2ヶ所の沢の吊り橋は11月に踏板が撤去されて通行不可になっているので、膝の下位までの深さを徒渉するのですが流れが速い上に冷たいので命がけです。過去に東大生が流されて死んだことがあると聞いていました。



大鳥池

夏道に沿って登っていくのですが、深い雪に覆われていてブナ林が続いているので見通しも良く、歩き易い所を選んで行けるのでむしろ夏より楽に思いました日が射すとブナの新芽の緑がまぶしい位に美しく映えています。3時間位で大鳥小屋に辿り着きましたが小屋は全体がすっぽりと雪に埋もれていて屋根だけしか見えません。2階の小窓から中にはいることが出来ましたが陽が差しこまないの真っ暗です。荷物を下ろしてすぐに池の畔に出掛けました。小屋を出て間もなく、以東岳を中心にした朝日連峰に囲まれように大鳥池がありましたが、何と池全体が氷っていて真白な雪に覆われていたのです。釣り糸を垂れるどころではありません。絶望感で頭の中も真白になりました。小屋の近くに池から川になって流れ落ちる場所に水門があり畳3枚位の広さの水面が出ていました。浅くて底が見えていて魚の姿など全くありません。それでも折角はるばる来たのだからと釣り糸を垂れたのですが釣れるはずもなくすぐにすくすくと小屋に戻りました。

夕方になって池の遠くの方から人影らしい動くものを発見、次第に小屋に近づいて来ました。2人の地元の人でした、何と彼らのビクには沢山の岩魚が溢れていました。びっくり仰天しました。小屋で夕食を一緒にしながらおしゃべり、自分達は明日帰るけど朝早く起きてくれたら岩魚の釣り場所を教えてくださいと言うのです。勿論早起きして池の上を一緒についていきました。池の奥の方の山から沢が流れこむ場所がポイントでした。スコップで雪を掘って穴をあけます。水面まで1 m以上ありましたので大変な作業です。ワカサギ釣りと同じいわゆる“穴釣り”です。深さは10 m位はあったと思います。餌はミミズ、釣糸を小さな穴から下ろしてゆくと底に着く前にすぐに当たりがあり20 cm位の型のいい岩魚が釣り上がりました。それからはいれ食いの状態でその日の中に100匹位の成果があり意気揚々と帰れました。味をしめてそれから3年間続けて出掛けました。竿はリールに変えて効率を良くし、穴掘りも新しい道具を持ちこんで手早く上手になりました。その効果あって行く度に2日間で200匹、400匹、800匹と大量に釣り上げたのです。

嘘八百と言いますが本当に800匹釣ったのです。帰るまで小屋の周りの雪の下に埋めておきます。最初に行ったときは夜遅くまでかかかって魚のはらわたを処理したのですが、次からは数も多すぎてそのまま持ち帰りました。800匹のときは一斗缶に積めて運んだのですが、さすがに重くて交代で背負いました。持ち帰った後の処理も大変でした。自分達だけでは到底食べきれず友人知人にあげてもまだ残ります。岩魚は美味しくて貴重な魚なので居酒屋でも買ってくれました。この事を山岳部の後輩に伝授して2年位は岩魚のおみやげを届けてもらいましたが、その後はぱったり釣れなくなったとのことでした。私たちが釣りすぎたのではないかと思われまふ。あれから40年以上経ちますから復活していることを願っています。今思えばそれぞれの感激はありましたが、やはり雲の平で釣り上げた一匹の感触、感激は未だわすれることができません。やはり岩魚釣りの醍醐味は溪流釣りですね、何匹釣ったかではなく、どきどきしながら竿を投げる時が一番だと思います。

今、山の詩人を静かに想う

長岡義人

今から五十五年前、私は初めて安達太良山に登った。上野発の夜行準急列車に揺られ、夜明けの二本松駅に降り立つ。始発のバスで岳温泉へ向かい、そこから歩き始めた。智恵子抄に謳われた名峰安達太良山の頂へ。その壮大な山容と澄んだ空気は、青かった私の心に深く刻まれたようだ。本棚に安達太良山のビデオを見つけた。それは学生時代一人で登った安達太良山が懐かしく、手元に置きたくて購入したものだった。



ある時 NHK の『日本百名山 安達太良山』を何となく懐かしく感じて再生した。映像に合わせた端正なアナウンサーの朗読が心地よく、次第に引き込まれていく。その中で、一人の山岳ガイドが紹介されていた。静かな足取りと悠然とした佇まいが印象的だったが、その時はまだ、それが奥田さんだとは知る由もなかった。テレビのナレーションは「福島山の山に関する本を数多く出版している奥田さん」と伝えていた。見終わってから何となく書棚に目をやると、背表紙に奥田博とある本が八冊も並んでいた。

それから十年ほどが過ぎた頃、私は高山の原生林を守る会に参加し、初めて観察会に足を運んだ。そこで出会ったのが奥田さんだったが、その時は、かつて映像で見た人物だとは思ひもしなかった。後日、何気なく再生したあのビデオの中に、若き日の奥田さんの姿を見つけたとき、私は驚きとともに、こみ上げるような嬉しさを覚えた。「ああ、あの奥田さんだったのか」と。大げさに言えば、著名な登山家に偶然出会えたことに、不思議な喜びが、そしてそれどころか、その出来事は、記憶の端に静かにとどまって、時折、ふと思い出されるようなものとなっていた。

私は長らくいろいろな山と出会ってきたが、山が「好きだ」とはっきり意識したことはなかった。青春時代の山岳部では、唯々登ることだけが目的で、山に入るとひとすら下山できる日のことばかり考えていた。テント生活は辛く、10日間で永遠のように感じられた。今も自ら山へ向かうことは少ない。それでも、時折ふとした折に山へ行きたくなる。どんな山でも苦しみながら登り、難行苦行の末に下りてくる。そうして、麓の温泉に浸かった瞬間、ようやく満ち足りた気持ちになったものだ。



しかし奥田さんは違った。傍目から見ても彼は心から山を愛し、山とともに生きていた。静かな足取り、万物自然に対する穏やかな眼差し、そして山を語る言葉の端々に深い愛情と誇りが滲み出ていた。観察会では遅れがちな私の後ろにはいつも奥田さんがいた。「もっと早く歩け」というような圧はなく、ただそこにいるだけで安心感を与えてくれる奥田さん。その自然と調和した彼の歩みに引き込まれ、気づけば私も皆に追いついていた。力まず共に歩けた。彼は私にとって特別な山の先輩だった。

ある時「最近、だんだん山登りがきつくなってきた、鍛えるのにはどうしたらいいのでしょうかね」と尋ねたことがあった。奥田さんは「数多く山に入ることです。高い山でなくてもいいから、自然の中に身を置くことです。山登りは山で鍛えるしかない」と答えた。さらに「では、車で登山口まで行くのも面倒になってきた自分が、それでも山に登りたいと思うようになるには」と問うと「自分の好きな物を見つけることです。花でも、鳥でも、虫（蝶々）、夜空の星でもいい、写真や温泉でもいいからなにか自分が楽しいと思えるものを見つけることだ」と教えてくれた。



いつも飄々としていた奥田さん、毎年開催している写真展でいつからか、奥田さんの作品が山の写真から、山の花やブナの森の写真、そして石仏の写真へと変わっていった。そしてそれらの写真たちは、見る者に何かを話しかけたがっているかのように、どれもが深く慈愛に満ちていた。加えてそこに記されていた奥田さんのメッセージには、自然を愛でる美しい言葉が添えられていた。それを見た高山の原生林を守る会の先輩会員の伊藤みどりさんは「奥田さんは詩人だ」と評した。私も全く同感だった。彼は大自然を愛した山の詩人だった。

奥田さんの著書には「仙台市出身」とあるが、奥田さんはテレビ番組の中で、「私にとっては、やはり安達太良山は故郷の山、身近な故郷の山だ」と誇らしげに語っていた。だがそんな奥田さんが「ふくしま百山紀行」のあとがきでは「福島山々も今、急激に自然を失いつつある」と憂えていた。高山の原生林を守る会にとって、しっかりと大地に根を張り大きく空へと伸びる、ブナの巨木のような存在だった奥田さん。大震災以降の福島に、原発廃炉を隠れ蓑にして、自然を破壊しようという魔の手が伸びつつあることを、奥田さんは静かな声で強く訴えていた。

ブナ(*Fagus crenata* ブナ科ブナ属)

ブナはドイツでは文化のシンボルとも言える「本」の語源となっている。ブナ林は欧州では、「森の母」と呼ばれ、その土地は常に美しいと言われている。また「繁栄」、「成功」の花言葉に示されているように欧州ではブナ林が成立する地域は農業生産上好適な立地条件を備えているとされ、大事に扱われてきた。日本では東北地方がこのブナ林が最も発達した地域で、農業の適地であるといえるかもしれない。

ブナは日本の湿潤温暖気候に最も適した樹種であるため、日本の夏緑広葉樹林帯を代表する樹である。特に新緑の美しさは秀逸で他に比類するものがない。ブナ林は冷温帯広葉樹林の極相林として位置づけられており、ササ→ウダイカンバ→ミズナラ→イタヤカエデ→ブナに至る生態遷移過程が提唱されている。ブナ林は極相林に位置づけられているが、日本では積雪地帯の一部を除き、純林的ブナ林は極めて稀である。移の結果としての純林的ブナ林はいまだ存在しないとされている。吾妻連峰の高山では、ほぼ純林的ブナ林が認められている。これ自体貴重な森林と言えるが、これは遷移の結果として成立したのではなく、過去にこの山域が大規模な崩壊があったことの証左となっていることを意味している。東北の山では雪崩が発生する急傾斜地にもブナ林が形成されていることが多い。

吾妻・安達太良連峰ではブナは標高 800 m 付近から 1300 m 付近の間に分布している。ブナは環境変動に対する適応性がなく、日長時間が14時間～16時間で温度25℃以下の環境条件でなければ正常な生育ができない。また土壌条件では分布限界に近づくほど石灰岩を好む性質を持つ。これらの性質は第三紀以降変わることなく維持されてきており適応を拒否する頑固な樹木といえる。

ブナの繁殖特性は完全には明らかにされていないが、同一森林帯ではブナの再生は極めて稀である。また、福島県では皆伐されたブナ林はミズナラとヤマグリが優先する二次林が形成されている。種子(実)の生産については隔年結果性があり、豊作年のサイクルは通常は3年に1度である。ブナの寿命は200年から300年とされており、吾妻連峰では中吾妻のブナが最も樹齢が高いと推察される。

東北型ブナ林はその構成樹としてチシマザサ、コシアブラ、オオカメノキ、エゾユズリハ、ハイイヌガヤ、ヒメアオキ、ヒメモチを伴うことが特徴となっている。吾妻連峰は東北型ブナ林と関東型ブナ林の境界域となっているため日本海に近い西吾妻山域と太平洋に近い東吾妻・高山ではそれぞれこの基本構成樹に加えてヒノキ科、カエデ科等で2つの気候特性を繁栄した分布の違いが認められる。また太平洋側に分布するイヌブナに比べて樹皮が白いので別名シロブナと言われるが、樹皮に種々の地衣類が着生するため地域によって特徴のある模様が楽しめる。特に多雪地帯のブナではサルオガセが着生しているのがよく見られる。吾妻連峰の高山には二次林のミズナラ林と成熟しつつあるブナ林が隣接し、ブナ林への遷移過程を観察するには好条件を備えている。

ブナの花は雌雄異花で雌雄同株。葉の展開と同時に開花する。雄花序は新枝の下部の葉腋から垂れ下がり、10 個前後の雄花が頭状に集まってつく。花序の柄には軟毛が密生する。雄花の花被も長い軟毛に覆われている。雄しべは12 個あり、葯は花被の外に出る。雌花序は上部の葉腋に上向きにつく。雌花は総苞の中に2 個入っている。総苞は4 裂し、外側は線形の鱗片に覆われている。花柱は線形で3 個、柱頭は赤い。



ブナは雌雄異花



雌花

第198回自然観察会 鎌沼 夏の高原植物観察会

日時：2025年7月13日（日）8:00～15:30

集合場所 四季の里正面入り口駐車場

集合時間 8:00 参加定員 20名

内容 姥ヶ原から酸ヶ平に至る鎌沼周回コースを散策し、夏の高原植物を観察します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、帽子、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用:保険代(500円)、申し込み:7月11日(金)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにて
お願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

西吾妻登山道誘導ロープ設置&植生回復作業のお知らせ

実施日と作業エリア

6月21日(土) 西吾妻山頂-天狗岩間湿原、若女平分岐湿原、西吾妻小屋南西湿原

6月22日(日) 西大巔～樹林帯

予備日 6月28日(土)、29日(日)

集合時間・場所: グランデコスキー場駐車場 7:45 (両日とも)

今回は、以下の事情により2日連続で実施します。

1日目、2日目日帰り参加と2日間参加(西吾妻小屋泊)の3パターンに分けて参加者を募集します。

1 主催代表の体力低下により、参加していただいた皆様と西大巔山頂までの所要時間が大幅に開き、作業が非効率になってしまうことを避けるため、代表は西吾妻小屋泊の1泊2日とする

2 例年、天元台から登って実施していた作業を1日目に実施する

3 新たにチングルマ挿し木と藻類装着マット敷設作業を実施する

作業内容

1 荷上げ

鉄杭 15本(西吾妻山頂-天狗岩間湿原で使用)、カケヤ、竹串、剪定鋏、トラロープ、根巻シート、源五郎ネット

2 誘導ロープ設置と植生回復作業

21日(土)

参加者全員で西吾妻小屋まで登り、西吾妻山頂-天狗岩間湿原と若女平分岐湿原に分かれて作業。時間に余裕があれば西吾妻小屋南西湿原の誘導ロープ設置。日帰り組は下山、宿泊組はBSCネット敷設作業の準備。

22日(日)

宿泊組は西吾妻小屋南西湿原の誘導ロープ設置とBSCネット敷設作業。その後、西大巔山頂で22日参加者と合流。挿し木班とロープ設置、登山道整備班に分かれて作業。



作業山域



西大巔崩壊地帯

振込による会費の納入は、郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第133号 2025年6月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP:<http://adumatakayama.justhpbs.jp/index.htm>
(URLが変わりました)

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188(夜間7時～9時)

郵便振替：02170-0-24351「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費(1000円)を添えて上記まで

編集：佐藤